

令和5年度第2回一関市協働推進会議 会議録

- 1 会議名 令和5年度第2回一関市協働推進会議
- 2 開催日時 令和5年7月20日（木） 午後2時から午後4時まで
- 3 開催場所 一関市役所 議会棟議員全員協議会室
- 4 出席者
 - (1) 委員 小野寺健委員（会長）、千葉真美子委員（副会長）、小笠原あい委員、小野寺浩樹委員、小原雪男委員、金野陸夫委員、佐々木承子委員、菅原幸子委員、千葉昭博委員、星義弘委員
 - ※欠席委員 太田真希子委員、小山賢一委員、佐山克子委員、千葉理恵委員、三浦幹夫委員、村田宰委員
 - (2) 事務局 小野寺愛人まちづくり推進部長、後藤治まちづくり推進課長、山崎政義課長補佐兼まちづくり企画係長、須藤直子主査、佐藤奈津子花泉支所地域振興課長補佐兼地域協働係長、佐藤美紀大東支所地域振興課長補佐兼地域協働係長、千葉久幸千厩支所地域振興課地域協働係主任主事、小崎ひろえ東山支所地域振興課長補佐兼地域協働係長、佐藤俊之室根支所地域振興課地域協働係長、足利学川崎支所地域振興課地域協働係長、小野寺嘉奈藤沢支所地域振興課地域協働係長

5 議 題

- (1) 令和4年度元気な地域づくり事業の実施事業評価の報告について
- (2) これからの地域協働についての意見交換
～各分野における現状と課題について～

6 公開、非公開の別 公開

7 傍聴者の数 0人

8 小野寺健会長挨拶

本日は、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

本日の予定でございますが、令和4年度元気な地域づくり事業の実施事業評価の報告についてと、これからの地域協働についての意見交換となっております。意見交換につきましては、今年度策定する地域協働推進計画に生かしていくということでございますので、欠席の方もいらっしゃいますが、出席している皆さんの中で、活発にご意見を頂戴したいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

9 審議事項

(1) 令和4年度元気な地域づくり事業の実施事業評価の報告について

資料に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 全体的に、自己評価の項目で何事業かを除いて良かったという評価しかなかった。今後継続するにしろ、新しい事業に取り組むにしろ、反省や課題、それから実施にあたっての問題点もきちんと示していただきたかった。

懇談会の評価については、半分ぐらいが特になしということだったが、それも次年度以降の事業に対して、どういう組立をしていくかということを考える上では、もったいないと感じた。

また、懇談会の開催時期の後に事業を実施したために、懇談会での評価をもらえなかったという事業が一つあったが、それについても今後、検討する必要があると思う。

委員 実施された事業については、本当に関係した皆さんが非常に一生懸命取り組まれたと感じた。中止した事業がいくつかあるが、これは新型コロナウイルス感染症の関係からすれば、致し方ない部分もあるが、例えば、2ページ目の下の「かやぶき民家を守って行こう」について、これは事業としては素晴らしいが、なぜ中止になったかということ、かやぶき民家を残す会と協議してきたところ高齢化によって解散することになったと理由が書かれていた。要するに、中止になったというのは致し方ないにしても、事業を計画する際に、密度の高い議論がなかったのではないかと、地域の事業でもあるので、その辺の議論について次回は配慮していただきたい。

委員 元気な地域づくり事業に関しては、本当に行政側の頑張りがよく見えるが、連携団体との調整というところがもう1つ頑張って踏み込まなければいけないところかと思っている。よかれと思って立案はするが、時間がない。担当者の状況を見ても時間のない中で企画して、1年間で事業を終わらせるということになるので、本当に短期間で準備して短期間で事業実施するという、その余裕のなさが、そういう詰めの甘さになっているのかと思っている。単年度というよりは、少し時間をかけてじっくり取り組む元気な地域づくり事業であってもいいのかと思っている。連携する団体も単年度で連携するよりは1年目考えましょう、2年目に実施してみましょう、3年目に振り返ってみようの方が多分連携する団体も成長すると思う。1年間やって終わりだと花火と同じであり、やはりじっくり時間をかけて連携、協働しながら事業を一緒にやっていく。行政と団体の協働の精神も生まれるし、団体としては関わることで育成にもつながるので、単年度にこだわる部分が変わっていけばいいと思っている。

いずれにしても元気な地域づくり事業の成り立ちは、市の職員の意欲で作っていくという記憶があるが、職員の皆さんがどの視点でこの事業を作っていこうかというところがスタートだったはずなので、少し時間をかけてやればよいと思う。

委員 事業の継続は何年間という取り決めはあるのか。

事務局 単年度で実施するというのが原則としているが、継続して事業実施することも可としており、一番長い事業で13年という事業もある。継続して実施することで、効果的に地域の活性化に繋がるなどの評価のあった事業については、長期間実施している事業もある。

委員 今の話は重要で、事業そのものではなく地域づくりというのは1年ではできないと思う。長い期間の中でみんなが理解して、協力をいただきながら地域をつくっていくというのが地域づくりなので、単年度というのは難しい。この事業の目的は違うのかと感じたのだが、伝承など様々な事業があるが、単年度で済むというのはどうなのかというのが結構あ

る。やはりそういうところを踏まえて、まず大きくは5年や3年などに
して、例えば、3年目の目的というのはこうと示した場合、そうするた
めには、1年目はどうすればいい、そこにお金を使うと2年目はそれを
若干充実させるなどの計画ができる。お金の使い方も、ほとんどが予算
を下回っている。計画が甘かったと受け取られてもしょうがなく、それ
は、節約したと言われればそれまでだが、これはお金では測れないもの
だと思う。

そういう部分を踏まえた中でやっていくというのが地域づくりなのかな
と、私なりに思う。その辺を踏まえた中で、やはりこの事業の捉え方と
いうのをきちんとやって、そして先ほど言われた関連団体もあるので、そ
こで共通項もやっていくというのが、本当の地域づくりである。そして、
充実してきたというときに、いつまでも関わるのではなく単独でやって
もらい育てる。それが地域づくりであり、まちづくりである。そうするこ
とによって、その人たちも一生懸命こうしよう、ああしようという考えも
出てくるのではないかと思う。そういう考えで進めていただければ、事業
を展開した人たちの願いもかなえられると思う。

委員 この事業の中で地域を跨いでいる事業もあるので、時間的な延長と地
域的な広がりということを考えて、これから大いにふくらませていけば
いいのではないかと思う。

事務局 元気な地域づくり事業は、原則単年度ということで取り組んできた
ところであるが、先ほど委員からお話があったが、単年度にこだわることは
なくやはり経過が大事と思っている。

昨年もできたから来年もという単純な継続ではなく、ストーリー性
を持った継続というのが、今後必要になってくると思っている。来年度以降
の事業の組立の参考にしていきたい。

(2) これからの地域協働についての意見交換 ～各分野における現状と課題につ
いて～

事務局から意見交換の進め方について説明を行った。以下、意見交換等。

委員 当協議会では現在、第2次の地域づくり計画の策定中だが、そこで住民からのアンケート結果や書かれていた意見を抜粋して述べる。

まず、まちづくり協議会が設立してから9年近く経つが、スローガンを知らなかったと回答した人が3割近くいた。もっと周知や地域住民に理解をしてもらうことが大事だと感じた。反対に、まちづくり協議会が市と協働で地域のまちづくりを行っていることについては、市で行っていたときよりも良いと評価している人が多くて、効果を感じてもらえていることに嬉しく思った。

また、行政区長や民生委員、保健推進委員などの役員のなり手がなく、役を頼むとみんな逃げてしまうので、仕組みの検討が必要という意見があった。

ほかには、夏祭りの民区の子ども神輿をすところ年々減ってきており、昔は民区で球技大会や子ども神輿など楽しかった思い出がたくさんあったが、今は少子化の影響で民区単位の活動が難しくなり、地区全体で進めていく方がいいのではという意見もあった。旗振り役の人がどんどん高齢化していき、その人がもう年だから辞めるという状態になってきているのが現状である。反対に、若い人たちの意識は低く、もう少しみんなに魅力を感じてもらえるようなまちづくりをしていきたいと思っている。

委員 私の地区の地域協働体は3つの自治会の集まりだが、なかなか思うように活気づかないというのが現状である。

今年、いちのせき市民活動センターの指導で地域づくり計画を新たに作った。その中で新しく期待している部分だが、若い人たちにとにかく好きなことをやってもらうということで、高齢の人たちが様々企画してもなかなか周りがついてこないのので、若い人たちでやってみたらどうかということをやったら結構な人数が集まった。

一昨日、初めての取組だったが、焼き肉をやったりピザを焼く人も出てきたり、ざっくばらんに親睦を図ろうということで集まった。様々な

事業を展開しているが、それぞれの自治会に帰って活動してくれるよう期待している。

いずれ高齢化が進んでいる。若い人についていくのも大変という思いもあり、そういう人達がなにか言っても仕方ないという思いもある。若い人たちに頑張ってもらいたいと思っている。

委員 私の地域には3つの地域協働体があるが、その立場がそれぞれだいぶ違う。自分たちで地域づくり計画を立てて地域協働体がやっていくという形のところと、私のところは逆に、地域協働体がどちらかというところと、様々な活動団体の連絡調整をする団体だと捉えており、そんな立場の違いでなかなか価値が合わないといった状況である。

私の地域協働体では、地域づくり計画ができてこれから動かしていこうという段階に入っている。理事たちに集まってもらって、とにかく自分たちでこれをどうやって回していくかということの話し合いを始める段階に入っている。なかなか若い人たちが集まって来ないというのは同じだが、私の地域は、幼稚園と保育園が今年で閉園になり来年からこども園という別な形になるということで、今、閉園事業をどうするかと相談をしている。そうすると、これをどうしたらいいかという相談が結構私に来ているが、逆にこれはいい機会と考えて、今一緒に取り組んでいる段階に入ったと思っている。

高齢化で、私も本当は早く譲りたいと思うが引き受け手がないということで非常に悩んでいる。様々な地域があり、地域の行事も様々な形であるので、そこをうまくお互いに協力しながらやろうと連絡は取っているが、簡単にはいかないというのが地域の課題である。

委員 今まで皆がお話ししたのと似ているが、一番の問題は若い人たちを活動にどう取り込んでいくかということ。

私もこの4月に関わり始めたばかりで、他の地域の協働体の様子はまだよくわかっていないが、地元の様子を見ると事業を実施するために様々な専門部会を作っているがそこにも結構関わっている。若い人だと、30代の人から50代の中堅クラスあるいは70代、一番年を取っている人

は、やはり 80 代になっているように、様々な年齢層の人が参加しているが来る人たちは固定されているので、なかなか広がりを見せていかない。どうしても年を取ってくると積極的に取り組む姿勢がなくなっていき、若い人にもう少し頑張ってもらいたい、で終わってしまうところがある。

先ほど、なかなか地域の役を引き受けてもらえないという話もあったが、その年代の状況に合わせて都合のつく時に来て、一生懸命様々な事業に関わりを持ってもらい、無理なものは無理しなくていいので、次都合のつく時に手伝ってもいいというそういう気持ちにさせる工夫をしていかないと、だんだん尻込みしてしまっ、広がりをなくしてしまうと思っている。具体的にどうしたらいいかというのはこれから状況を見ながら工夫している状態である。

委員 元気な地域づくり事業の資料を読んで感じたのが、似たような事業が各地域でかぶっているが、そういうのは連携できないのか。

また、一関市は外に発信して外の人たちを内に集めたいのか、それとも、内を活性化させたいのかどちらなのかと感じている。先ほど事業の評価で、外の人が来てくれたが中の人に来てくれなかったとあった。本当は誰に向けてその事業をやりたかったのか、外の人に来て欲しかったら成功だと思う。しかし、その意見が出るということは、本当は中の人に来てほしかったのかということになり向ける方向が違ったのかと思う。

人が集まらないというのは、8つの地域どこも同じ課題を抱えている。似たような事業を、各地域が連携して取り組むことが出来ないのか。千厩のサウナがそうだったように、連携して1つの事業はここというよりは、部門分けをして最終的に1つにする。一関市全体で盛大に盛り上がるのは少なく、単発のイベントがたくさんあるということを一市民として感じている。

バルーンフェスティバル、地ビールフェスティバルも、そこだけがという感じがする。その日は、一関は全体が地ビール、全体がバルーンというのではなく何かそこだけというような気がする。千厩の盛り上がりが一関に飛び火し、一関が色に染まる、そのような盛り上がりがあった

らいいと感じている。また、SNSで一関を一生懸命紹介している若者が何人かいて、一関をこんなふうに紹介してくれている、個々の若い人たちが動いている、やっている大人たちがどれだけ面白がってやっているか、面白いところには勝手に人が集まってくると感じている。私にもやらせてほしいと言われるような一関になってくれたら、活動を支援していきたいと思う。

委員 協議会の現状と課題だが、皆さんがおっしゃる通り高齢化が進んで、どんどん年をとれば行きたくないというか、夜に人が集まるのも少なくなっている。協議会は事業をやるというよりは話し合いを主にやっているもので、どうしても同じ人が集まってしまうことについては、この間も代表が言っていたが、今来てない人の参加を増やすためにもっと来る工夫をしないといけないと言っていた。

まちづくり協議会の方で、SNSを活用し地域のキャラクターの着ぐるみを通して発信をしているが、結構それが地域だけではなく、地域の外にも反響があり様々な人が地域を見てくれている。そういうのを見て、地域の人たちも元気になってくれればと思っている。地域で作っている情報誌で、地域の情報だけ徹底して紹介しているが、そこで自治会の活動を頑張っていることを紹介することによって、自治会の人たちは結構元気になり私の事を紹介してもらったと喜んでもらえると思う。そういうのを継続していけたらと思っている。

委員 私の地域には3つの地域協働体があるが、それぞれ特徴はあり、現状と課題については、各委員さんおっしゃったように高齢化が進んでいることである。ただ、高齢化は進んでいるが、新しい人が少しずつ入り始めた。新しい若い人と言っても、20代、30代などのそういう若い人ではなく、60代の方である。代替わりとは言わないが、自治会長の顔ぶれも少しずつ変わってきているのでこの機会をどうやって生かしていくかも現在の課題と思う。

地域協働体の場合、役員の任期は2年で2年経つと変わってしまい、そのときに、地域協働とはどういう事かというあたりがどうしても繋ぎ

きれないので、いちのせき市民活動センターに協力いただきやっているが、協働に関する考え方や立場をきちんと伝えていくということが一番大きな課題と思う。例えば、事業を抱えてしまって様々ご指導いただいているが、やはり円卓会議など、様々な団体を繋いで円卓会議を活性化する、そういう方向にシフトしていく必要があるのかと私どもの協働体でも捉えている。

また、地域全体としては、代表者間で連携がとれているのかということも課題と捉えている。

委員 先ほどの高齢化が進んでいるという話と同じように、少子化もすごく進んでおり、私の地域だと10年前の半数ぐらいの人数になっていて、5年後にはさらに少なくなるという現状である。子どもが少ない地域のことを考えると、町に子どもがいないというのはやはり何か活動するにしても、お年寄りだけの集まりになってしまう。そして、高齢に伴い家から出づらくなってくるといのは、本当に寂しい状況になると感じている。どうすればいいかということ、やはり若い人たちに地元に残って仕事してもらい、結婚して子どもを作っていただくというのが一番理想だが、なかなかそこまでいかなく独身でいる方もたくさんいる。難しいといつも思っている。

婚活事業を市でも企画しているようだが、なかなか進んでいないように感じている。一関地域だけではなくて、例えば、花泉と川崎などで婚活事業をしたり、様々な地域と交流をしながら出会いの場を設けるのもいいのではないか。また、若いうちは子どもを育てるのでいっぱいのため、会議などに出席するが難しい。出てもいいという人はもう学校の役員などになっており、その人たちも1人が何役もやっている。それは、お年を召した方だけではなく若い人もそうなっている。私もやっと子育てが終わって、もう会議に出ることもできるかというところで、年老いた母が元気でいてくれるといいと思っている。

やはり、まちを活性化するために、みんなで話をしたり食事をしたり、それがきっかけになることもある。新型コロナウイルス感染症の影響で

そういう会議に集まることもできなかつたので、少し落ち着いてきたら、活性化していくのかと期待している。

委員 私の地域の地域協働体の地域づくり計画は、5年計画の見直しの年であり、各自治会に9月までにそれぞれ課題や、それから解決策をみんなで話し合っ、それを上げてもらうことにしている。計画作りには段階があり、自治会は43で地区が8つあるが、地区で一本にまとめて年内に町の住民自治協議会の本部にあげてもらおうことにしている。それらを全てお互いに協議をしながら、本当に課題となるのはなにかを取りまとめ、住民自治協議会の地域計画ということで全世帯にお示しするために、前回は冊子にして、全世帯の2,500戸にそれぞれが計画したものを配布したが、なかなか周知できなかった。

なぜかという、旧町時代に各自治会でミニ計画を作り、その基礎があったはずなのだが、なかなかそれがうまくいっていないのかと思う。当然時代が変わってくるから、そういう部分はあると思う。やはり、自分たちの地域はどうするかというその危機感というか、少子高齢化というのは避けて通れない社会と現状だが、それをどうするか悩むのではなく、それを逆手に取るというとおかしいが、そうせざるを得なくなってきたところだと思う。それをどう変え地域でどう解決するか、要するに、高齢化して買い物に行けないがどうするかということを、行政に投げかけるのではなく、自分たちで考えてどうするか考える。それでどうしても解決が難しいというときには、行政などに話をする。初めから行政を頼るのではなく、自分たちが考えてやらないとやはり行政も動かない。

説得力がないということで、自分の自治会ではそう話をしたのだが、そういうことが今までの町の住民自治協議会の考えの一部でもあったので、そういうことを起草しながら、新しい計画の中でチームがどのような計画を考えていくかというのが楽しみであり、不安でもある。それを知らせるということで、毎月、協議会の広報誌を発行し理事会の中身や、地域の動きをみんなに知らせている。

先ほどから言っている少子高齢化の少子の部分は、私の方では令和4年に生まれた子どもが17人しかいない。17人ということは、小学校に入るときに17人しかおらず、学校が今2つあるが、もし分散すれば10人を切る。そういう中で、子ども達の環境も考えなければならないし、当然地域に17人が全て残るとは限らない。そういうことも踏まえた中で、今の支所長も数字を示して、危機感を持っているということで合っていると思っているが、やはりそのように数字を出した方がいいと思う。数字を見せるなりして、みんなに周知することは大切である。

若い人たちについては、FESTという団体がこの20日にふじさわ盆DANフェスを計画して、中学生や小学生を巻き込んで創作踊りをやる。支所の職員も若い人たちは一生懸命であると話をしていたが、やはりそういう若い力が出てきていると感じている。FESTが参考にしたのは、室根の室愉会である。FESTの若い人たちは40代であり、そこが課題になってくる。若い人たちと懇談会すると何が一番問題になるかということ、やはり年を取った人たちの考えや、昔はこうだったなどの昔話が始まる。そうであれば若い人たちは居づらくなると思う。お祭りをやっても、昔はこうやったからということ若い人たちが来なくなる。先ほど話があったように、若い人たちに任せて好き勝手にするというのも大切である。そういうのがやはり大切だと思うが、今から13年、14年前の震災の時、宮城県女川町で復興計画を策定する際に若い人たちの声だけでまちづくりをということで、還暦以上は口を出さずという決まり事だった。そういうところも大切なのだと。やはりどうしても田舎に来ると昔話が始まってしまう。

現状はそういうのもあるが、課題が多くて、それを一つ一つ身近な部分でどうやっていくかということの話だが、その計画を見ながら一つ一つどれを大切にしていこうかということを考えながらやっていきたいと思っている。

委員 それぞれの皆さんのテーマで話をしてもらったが、どちらかというともう少し協働とは今この辺がよくないのではないかというのを聞いた

い。協働のこの辺が少し気になる、行政との距離感が掴めないなど何か思いつくところがあればお願いしたい。

委員 個人的な意見になるが、行政の取組については、正直言って一生懸命やってもらっている。課題解決についても、親身になって駄目なものは駄目、考えましょうなど、年に6回から8回理事会があるが、その前に地域振興課と出す議案を審議する。地域振興課だけではなく、支所全体のそれぞれの課で様々な地域との関わりがあるものは、理事会に出して、こういうことをしたいがどうか、こうしますよという情報提供をしてもらえる。情報提供をしていただくと、さっき言ったように理事である8つの地域の会長は地区協議会の理事として必ず入るので、地域に伝わる。

地域協働体として行政に対し、時々お金がないという話をすることもある。道路関係だと支所は産業建設課が窓口になっているが、2年に1回地域から要望を出してもらってそれを精査し、優先順位を付けやれる、やれないという回答をもらっている。特に、支障木の伐採については速やかにやってもらっている。そして理事会で、終了した、来年やるという進行状況の報告を受ける。地域協働体として行政に対して、様々細かい部分で問題はあるのだろうが、他の地域の方はわからないが私は別にないと感じている。

また、指定管理を受けている市民センターがあり、それが一番地域づくりに有効だと思う。市民センター事業として、小中学生や女性、高齢者事業などは指定管理を受けている市民センターの一番のメリットである。

協議会は自分たちで事業をしていない。事業としては、花植えと花植えの奨励、リサイクルの3つが大きな事業である。あとは、それぞれの自治会や協議会で事業をやっている。

他の話を聞くと、何々部会で事業をやると疲れてしまうとの声がある。それぞれの取組なので駄目と言っているわけではない。私の地域の地域協働体の部会は、総務と産業と広報で事業は特段ないので、やりやすい。理事になってもやりやすいが、役員になりたがらないのはそのとおりで

ある。2年任期で地区が5つあるが、この自治会長は10年選手である。10年やっていると気心が知れていて、すぐ集まることができる。それを2年ずつ変わっていくと地元もやはり難しいのかと思っている。そういうところの組替えは必要で、様々な部分で惰性や甘えが出てくるので、長くやればいいとは思わないが、やはりそういうところかと思う。

様々な面で市民センターの指定管理は別なお金で事業ができ、また、声も聞くことができるので、やはり市民センターをうまく活用し協働体そのものが振り分けて、そして活動を工夫しながらやっていくのもよいと思う。

委員 私の地域のチーム会議はすごくいい。前会長からも言われていたが、やはりチーム会議の場がきちんとした協働の現場であるというように言っていて、ほかの地域でも去年からチーム会議を復活させて進めているが、もう少し行政と事務局や役員との協働の場としてチーム会議を作っていくことを、頑張っていかなければならないと思う。

委員 チーム会議については、私の地域は地域協働体が1つだから大丈夫である。4つも5つも地域協働体があると、職員が大変なので、1つにまとめて連絡協議会を設置し、そこでやってはどうか。やはり、地域協働体と行政が連絡や連携を取るのにはチーム会議だと思う。そこに地域振興課長や、担当係長、何かあれば産業建設課や市民福祉課から職員が来るのでお互いにやろうとする。どうするかと地域に投げかけるということは、お互いに連携を取ろうとする気持ちであり、ここに不信感を持ったならば進まないことになる。協働でと、言葉だけで言いながら中身がない協働になってしまう。

委員 チーム会議は、どこでもやっているのか。

委員 チーム会議は昨年からすべての地域でやっている。

委員 支所単位でやるので、地域ごとでやり方が違っていて、事務局とチーム会議をやっているところもあれば、会長など役員も入れたチーム会議をやっているところもある。地域によって様々なので、チーム会議の持ち方についても市の担当者の中で検討してもらいたい。

委員 協働体に関しては、今はチーム会議があるので行政との距離がすごく近くなってきている。そこで連絡の調整やお互いに情報の共有をすることができるので、すごく距離感は近くなりいい感じは出てきている。そこを作るのが一番大事であり、そうでないと要望書を出して終わりなど、協働ではなくて一方通行になってしまうので、そういう関係性を作るのがすごく大事と思っている。

皆さんの意見を聞いてもやはり地域の中で、役のなり手がいないなど地域側の課題もあるが、行政と向き合う中でもやはりその距離感と課題も出てきているので、行政と協働体がどう向き合うかというところの仕組みを作らなければいけない。

また、若い人の参加や、役のなり手というのは、協働体側としてももう少し地域に働きかけていかななくてはいけない。それぞれの地域や自治会にももう少しこれを頑張ろうと言っていかなければ駄目であり、積極的な声掛けというのは大事であるといつも思っている。やはり事業をすると疲れてしまうので、何をするにしてもまずはみんなで話合いと思っている。

委員 自治会そのものに人数がいるときは事業をたくさんできるが、今はまとめてやっている。要するに、若い人を入れると日曜日しか出来ないが、日曜日に集中して毎週やると疲れるので、今まで午前中に2つやっていたものを1つにして、1つの事業として実施する。

自治会の中で話合いをすると、それぞれ知恵が出てくるのでなるべく効率よくやろうとなる。川崎は、まちづくりポストにすごく意見が入っていて、皆さんがまちづくりポストの意見の議論ですごく疲れている。すごい気づきと発見にはなるが、ポストの話題が中心になりすぎているように感じる。

山目の地域づくりスローガンは、「笑顔咲く、ちょっとおせっかい山目」で、ちょっとおせっかいというキーワードが入っている。人口が一番多いから、堂々とおせっかいしていかないと関わりが作れないのでおせっかいという言葉をやと入れた。しかし、そのスローガン

を知らないと言うのは、周知が足りないことになる。そのため、協働と言ったときには、どちらかという地域協働体で地域づくりの事業をやらなければいけないというようになっている。協働体がスタートし、5年10年と時間が経って意識がそちらにいつているが、もう1回原点回帰で話し合い中心にしていきましょうということは、より必要かと思っている。前回の協働推進会議の際に発言があった、統合花泉小学校の建設工事の件のように、住民の意見を行政が吸い上げられるような話し合いにもう少し時間をかけるべきだと思う。元気な地域づくり事業の話もそうだが、やはり急いで話し合いをやってしまうと、本当に拾いたいことが抜けてしまうので、これからはもう少し考えていかなければいけない。協働は、話し合いの部分を丁寧に時間に追われなくて考えてやっていくということが大事と思う。また、若い人の参加というのはいつの時代も課題と思うが、若い人と話してみると、結構嫌ではないというのできっかけづくりが大事と思う。

若い人たちは、自分たちから参加すると言わないで声をかけられるのを待っている。一緒にやろうと声を掛けたら、参加してくれた若い人が次へ向けて1人1人声掛けをすると、1人が2人、2人が4人となる。しかし、親が仕事で難しい、帰りが遅いなどと言って、参加してくれないためにそこで切れてしまう。住民の参加は、親世代や上の世代の気持ちを変えていかないといけない。「若い人の」、と冠をつけてあげないと出てくれない。

協働体に関して言うと、話し合いを大事にしていかないと駄目だということところが、皆さんからの共通の意見で見えてきた。また、各分野からは、子育ての分野の委員しか来てないので地域防災や他の分野の議論も次の機会に聞きたい。

委員 行政側の説明も足りなかったとあったが、役員が変わった時に協働体に対して説明がないというところは、協働体でも説明していかなければならない。行政側も地域協働や協働の説明がしばらくの間止まっ

ているので、何か協働をやっているようでやっていないような見え方になっているところも今の課題と思う。

事務局 現在、地域協働推進計画策定に向けた住民懇談会を開催しているが、9月中旬までに全ての地域で開催する。これまで一関地域2か所で開催したが、やはり後継者不足という声や次の若い人たちに期待したいという声も出ていた。

また先ほど、役のなり手不足などの話が出たが、そこは以前からの課題でなかなか解決にはいたっておらず、すぐには難しいと思っている。今後、どのような形でこの計画に反映させていくかというところも考えていかなければならない。

先ほど発言があったが、地域協働体は事業をやるというところではなくて、円卓会議の組織を、いちのせき市民活動センターを中心に地域で説明をしている。今度の住民懇談会の中でも事業をやるということよりは、初心に帰って円卓会議で話合いの場を持っていきましょと説明をしている。まずは、もう一度地域協働体がどうあればよいかというところも説明をしながら進めていきたい。

10 担当課 まちづくり推進部まちづくり推進課